

英雄詩からロマンスへ

——中世英雄詩『ホーン王』の主題を追って——

西 納 春 雄

I

ノルマン・コンクエスト（1066年）に始まるフランス語とフランス文化の流入によって、英語は被征服者の言語となり、これよりしばらくの間書き言葉としての英語の役割は途絶えた。しかし征服から約二世紀を経て十三世紀末になると、仏領の喪失、国王権の衰弱、土着貴族勢力の台頭など、仏語圏と疎遠になる要因が働いて、英語国民としての国語意識が国の中に次第に濃厚となってきた。聖書にもとづく壮大な歴史物語詩 *Cursor Mundi* は、そのような当時の国民精神を雄弁に語っている¹⁾。だが、これより早く、恋愛を主題とした韻文による物語詩、ロマンス (romance)²⁾ は、十三世紀初頭に成立したものが現在に伝えられている。「ブレトン・レ」(“Breton lays”)あるいは「韻文群小ロマンス」(“verse romances”)として知られる作品群がそれである。これらの英詩の多くは、素材をケルト、ゲルマンやイングランドの伝承、あるいは大陸伝来の物語にとっているが、主題、文体、作詞法には、ヨーロッパ大陸、殊に北フランスで十二世紀中葉より創作され、仏語支配圏であったイギリスにほぼ共時的に移植された仏語ロマンスの伝統の強い影響が読み取れる。これら仏語ロマンスの多くは宮廷風恋愛の要素を取り入れた騎士の冒険物語であった。この伝統を受けた英語によるロマンスの流行は、ノルマン・コンクエスト以来、支配階級の言語としての位置から転落していた英語が、大陸フランスの伝統を取り込み、娯楽を目的とする物語詩を介して台頭してきたことを示す。そして

さらにそれが書きとどめられるに至ったことは、イギリスにおける英語文化の成熟と、英語を母語とする人々の自意識の確立の証左である³⁾。このような英語ロマンスのうちでも最も初期のものとして知られるのが『ホーン王』(King Horn)である。

『ホーン王』はその作詩法と取り扱う主題において、英詩の転換期を示す重要な作品であるとされる。まず作詩法の点においては、ほぼ完璧に近い二行押韻(rhymed couplet)を用いた脚韻詩の形式をとっている。これは、アングロ・サクソン詩の伝統であったそれまでの頭韻詩から、フランス語の韻律法の影響を受けた作詩法への移行を示す最も早い時期の実例であるとされる⁴⁾。主題の点から見れば、この詩には史実性、民族意識、英雄賛美などの英雄詩的な特徴を持つ主題と、設定の非現実性、個の意識、男女間の愛、冒険、等のロマンス的特徴を持つ主題が共存する。これらの点から『ホーン王』は、形式的にも内容的にも中世初頭における英詩の転換期を示す作品であるとされてきた。

しかしながら、この詩の主題の構成と特質に関しては、現在に至るまで十分な分析がなされているとは言いがたい⁵⁾。それは、限られた詩行(1530行)の中に多数の挿話が歌い込まれているので、筋の展開が複雑で断片的であり、個々の挿話の描写が概して素描的であって、登場人物の性格づけ、行動の動機づけなども荒削りで、それ故に精緻な分析に耐えないとされてきたためである。しかし主人公の行動に着目して精読するならば、なるほど描写の繊細を欠くとの謗りは甘受しなければならないであろうが、物語は主人公の成長というクロノジカルな軸を中心に展開していて、矛盾錯綜することはないことがわかる。そして物語には輪郭の明瞭な複数の主題が扱われ、主題相互間に有機的で緊密なつながりが保持されている。『ホーン王』を構成するこれらの主題は、『ホーン王』に先立つ物語の伝統に立脚したもので、複数の異なった伝統がそれぞれ特徴ある主題を提供している。『ホーン王』は、伝統的主题を組み合わせて独自に展開することにより、新たな物語世界を創出しているといえる。本稿では『ホーン王』の主題の構成とその特質を分析して、この作品が複数の伝統を

どのようにその中に生かしているかについて考察する。

後に詳述するが、この作品には大きく三つの詩的伝統が反映していると考えられる。それは北方ゲルマンの英雄詩の伝統、フランス渡来の英雄詩である武勲詩の伝統、そして北フランスのロマンスの伝統である。本稿ではこれらの伝統に関して、それぞれの代表的詩作品と『ホーン王』を、主題に焦点を当てて比較考察し、三つの異なった詩的伝統が『ホーン王』の中にいかに取り入れられ、あるいはいかに拒絶されているかを明確にしたい。作業の手順としては、まず詩の筋を手掛かりにして『ホーン王』の物語の構成と主題の特徴を分析する。次にそれぞれの主題を、それぞれの詩的伝統を代表する作品の主題と比較考察して、それらの詩的伝統が『ホーン王』に残した刻印を探る。そして最後に『ホーン王』における旧来の伝統の革新を検証して、中世詩の伝統の中におけるこの詩の位置を明らかにしたい。

II

中世英詩『ホーン王』⁶⁾は、英語で書かれた中世物語詩の最古のものとされる。分類上は、アングロ・サクソンの古い伝説や、伝承中の英雄を主人公として扱った作品群、いわゆる「ブリテンもの」に属するとされる⁷⁾。この作品には三つの写本が現存するが、そのうちイギリス、ケンブリッジ大学図書館所蔵のものが最古のもので、原作に最も近いと考えられている。この写本の成立年代に関しては1300年前後が有力視されているが、なお議論のあるところである。物語そのものは、写本の成立に先立って、1225年頃に完成したと推測されている。作者は不詳。方言は中南部地方のものである⁸⁾。

この詩の主題を考察する前に『ホーン王』の物語の構成を確認しておきたい。

主人公のホーンはスッデン国の王子である。回教徒の突然の侵入によって父を殺され、十二人の従者（少年たち）と共に小舟に乗せられ海に流される。小舟はウェスターネス国に漂着し、その地の王エイルマーに召し抱

えられる。やがてホーンは王女リメンヒルドと恋仲になり、ひそかに結婚の誓いを交わす。リメンヒルドの助力で騎士に叙任されたホーンは、侵入してきた回教徒の一軍を相手に戦い、騎士としての力量を証明する。だが、従者の一人でホーンをねたむフィケンヒルドに王女との不義を讒言され、ホーンは王に追放される。ホーンは海を渡ってアイルランドに至り、その地の王サーストーンに仕える。ほどなく回教徒がこの地を襲うが、ホーンは王子たちと力を合わせて敵を全滅させる。このとき戦った敵の首領である巨人は父の仇であり、これを倒すことでホーンは父の死に報いることができた。一方ホーンの不在中、ウェスターネスでは隣国のモーディ王がリメンヒルドに強引に求婚していた。ホーンはこれを聞くと急遽帰国して彼女の難を救い、エイルマー王の誤解を解いて二人は結婚する。ホーンはリメンヒルドとの床入りをはたすに先立って、故国スッデンを回教徒の手から奪回することを誓う。ホーンは故国に戻って回教徒を全滅させ、回教徒の侵入以来ひそかに岩窟に身を隠していた母親ゴドヒルドを救出する。ところがこの遠征中に、ウェスターネスではフィケンヒルドがホーンの不在に乗じてリメンヒルドをわがものにしようとして彼女をかどわかして堅固な城にたてこもっていた。リメンヒルドの危機を夢見によって知ったホーンはウェスターネスに取って返し、配下達とともに吟遊詩人の一行に変装して城内に侵入し、戦いとなってフィケンヒルドを倒す。悪は一掃された。ホーンは忠義を尽くした従者たちに、戦勝によって得た国々を分与した後、リメンヒルドを伴って故国に帰り幸福な余生を送る。

詩を俯瞰すると、『ホーン王』は、究極的には主人公ホーンを中心に展開する一人の若者（王子）の試練と成長の物語といえることができる。主題に着目すれば、物語は大きく三つの主題から構成されていると考えることができる。まず第一の主題は主人公ホーンの祖国喪失と追放に始まって、彼が帰還し、祖国を奪回するまでの「追放―帰還」の主題。第二にキリスト教対回教徒の戦

いの主題。さらに第三は、ホーンとリメンヒルド (Rymenhild) との恋愛の主題である。これら三つの主題を便宜的にそれぞれ政治的主題, 宗教的主題, 恋愛の主題と呼ぶことにする。これらはそれぞれ独立した意味のまとまりをもっているが, 相互に絡み合って展開するとき, 主人公ホーンの行動に重層的な意味を与えることになる。以後, まず個々の主題を個別に考察して, ついで三つの主題の相互関係を検討してゆく。

III

『ホーン王』における最も基本的な主題は, 政治的な主題である。この物語は, 父を殺害され, 故国を喪失する (35-114) 王子が, 父の仇討ちを果し

(867-876), 故国の奪回を成就する (1363-1378) までを歌っている。すなわち一人の王子が幼時に祖国から追放され, 帰還して故国を回復するという政治的な主題が物語の基本的な枠組を決定している。幼い王子は追放され流浪する間にたくましい若者に成長し, 故国に戻って失われた王国を敵の手から回復する。この「追放—成長—帰還」の主題は古典文学以来ヨーロッパ文学において好まれた主題の一つであるが⁹⁾, 中世イギリス文学では『ホーン王』のほかにも, 十三世紀末に成立したとされるもう一つの初期ロマンスの傑作, 『デンマーク人ハヴロック』 (*Havelok the Dane*, 以後『ハヴロック』と省略) にも共通するものである。『ホーン王』においては政治的主題が他の二つの主題と並立し, それらとほぼ対等な価値を与えられているのに対して, 『ハヴロック』においてはこの主題は, より重要な主題である物語の宗教性を補佐する機能を果たしているにすぎない。

二作品の相違は, 『ハヴロック』における女主人公の不在と, 物語中での主人公に与えられる超越者からの庇護に, 究極的には帰すことができよう。女主人公の活躍は『ホーン王』に特徴的である。すなわち『ホーン王』では, ホーンばかりでなくリメンヒルドも物語の展開の中で重要な役割を果たして, ホーンとリメンヒルドの恋愛物語が重要な主題となっている。だが, 『ハヴロック』

は終始一貫主人公ハヴロックただ一人を中心にして物語が展開する。もっともハヴロックもゴールドバラ (Goldeborw) という妻をめとるが、彼女は物語の展開の中では全くの端役に終始するのみである。これよりもさらに大きな相違は、ハヴロックには常に神の加護が約束されている点である。ハヴロックもホーンと同じく、正当な王位継承者であるにもかかわらず、反逆者に故国を追放され、追放の地で肉体と精神の両面で試練と受難の連続を体験する。そして逆境によく耐えて最後には祖国の奪回を成就する。だがホーンと異なるのは、この過程においてハヴロックが、神の恩寵を受けた特別な人間、通常の間人ならぬ聖別された存在であることが物語の中に常に暗示され、表明されることである。ハヴロックの試練の過程はキリスト受難の過程を直接的に暗示しており、彼の体には神に選ばれたものとしての「しるし」が現出し¹⁰⁾、彼が超自然的な存在からの助力、人知を超えた存在からの加護を受けるべき者であることが詩の中に明記されている。

一方、ホーンの祖国奪回は、超越者や超自然の力によって最初から予定され成し遂げられる性質のものではない。『ホーン王』において重要なのは、祖国奪回につながる主人公の一連の活躍は、部族の長あるいは指導者としての彼への期待と責務の遂行とみなされることである。彼の使命は部族員全体の利害を背負って戦い、勝利を収めることであり、この使命を全うすることで、ホーンは部族の構成員がその指導者である英雄に求める役割を完璧に遂行する。『ホーン王』における戦いは、侵略者である敵への仮借のない復讐と、一族同胞の利害を守るための生命を賭した戦いである。これはゲルマン民族の詩に共通する特徴であり、北欧のサガにおける主題とも呼応する¹¹⁾。イギリスにおいては、アングロ・サクソン民族の残した『ベオウルフ』(Beowulf) に部族の指導者としてのゲルマンの英雄の勇猛な活躍を読み取ることができる。そこで次に『ベオウルフ』に歌い込まれている英雄像を探り、それを『ホーン王』のそれと比較することで『ホーン王』のゲルマン的英雄像の側面を検証したい。

『ベオウルフ』は七世紀末から八世紀末の間に成立したとされるアングロ・

サクソンの英雄詩であり、ゲルマン民族の理想とする英雄の姿を歌う¹²⁾。すなわち英雄は豪胆で武勇に秀で、困窮する臣民と同胞を、敵に単身挑戦して身を挺して救う。物語の冒頭ベオウルフは隣国の王フロスガール (Hrothgar) が怪物グレンデル (Grendel) の跳梁に悩まされていることを知り、助力のために出発する。ベオウルフとグレンデルの戦いを通してアングロ・サクソンの理想とする英雄像が骨太に浮き彫られる。これが詩全体の基調となる。

Ðæt fram ham gefrægn Higelaces þegn
 god mid Geatum, Grendles dæda;
 se wæs moncynnes mægenes strengest
 on þæm dæge þyses lifes,
 æþele ond eacen. Het him yðlidan
 godne gegyrwan; cwæð, he guðcýning
 ofer swanrade secean wolde,
 mærne þeoden, þa him wæs manna þearf.
 Ðone siðfæt him snotere ceorlas
 lythwon logon, þeah he him leof wære;
 hwetton higerofne, hæl sceawedon.¹³⁾

(194-204)

ここには理想的英雄の生き方の質、群雄割拠の時代における指導者のあるべき姿が描かれている。英雄は血統正しく、知恵と勇氣に充ち、その地位にふさわしい精神的、肉体的力を備え、その力を一族同胞の窮状を救うために行使する。彼の活躍はもちろん彼個人に榮譽をもたらすが、その榮譽はあくまで彼と利害を共にする集団の利益となることによって裏打ちされていなければならない。換言すれば、彼の行為は常に集団を指向した目的性を備える。

『ベオウルフ』は善と悪とが鋭く対決する世界である。前半部で主人公はフロスガールの窮状を聞いて海を渡り、怪物グレンデルさらにその母と対決する (189-2199)。後半部で彼は、彼自身の治める王国をさいなむ火龍と戦う (2200-3182)。これらの敵はいずれも超自然的な存在である。すなわち暗黒の沼の世界に棲息する怪物グレンデルとその母は、カインの末裔 (Caines cynne)

とされる存在である(104-107, 1258-65)。異教世界の使者グレンデルらと旧約聖書創世記に登場するカインとを同列に置くことで、このものたちの悪の性質が始源的であることが暗示される。火龍もまた同様である。これらは英雄の同胞を殺戮し、社会秩序を攪乱する存在、反社会的な存在であり、英雄の所属する宮廷や共同体の敵であり、破壊者であり、部族の直截的な脅威である。ベオウルフはこの脅威から部族を救出する使命をおびる。彼は終始正義と善を象徴し、決して敵と妥協することはない。『ベオウルフ』においては善と悪は必ず互いに顕在する対立項であり、おのおのは矛盾や葛藤、内省をそれ自身のうちに含まない。一貫して善はあくまでも善、悪はあくまでも悪であり、二者の間に妥協点を見いだすことはない。

ベオウルフが勝利する時、それは同時にまた、彼の所属する部族の勝利でもある。『ベオウルフ』の前半部、ベオウルフがグレンデルとその母に勝利することは、ベオウルフ個人の卓越性を証明し、ベオウルフの名誉となるだけではない。それは同時に、ベオウルフを送り出した一族の卓越性を証明し、一族に名誉を与えることになる。だが勝利はまず第一にベオウルフの地位を確定する。ベオウルフは彼の一族の信頼にこたえることで、一族の集団の意志の代行者、利益の守護者となった¹⁴⁾。物語の後半では、この確立された地位と使命が、国王となり、グレンデルとの戦いから五十年たって老境にあるベオウルフに、火龍との戦いを決意させる。火龍は何よりも彼の臣民に害悪をおよぼし、ベオウルフは彼等の守護者であるのだから。

... "Ic geneðde fela
 guða on geogoðe; gyt ic wylle,
 frod folces weard fæhðe secan,
 mærdū fremman, gif mec se mansceaða
 of eorðsele ut geseceð."¹⁵⁾

(2511-2515)

ベオウルフは苦戦し、致命傷を負いながら火龍を倒す。彼はこの勝利で、一族

がよりどころとする秩序と平和の至上の保護者としての彼の役割、彼の政治的
使命を再度完遂した。彼は息を引き取る間に、自分が火龍より得て人々に分
配できる宝の山を眺めて、一族のためになし得た自分の功績を確認する（2794
-2801）。ベオウルフの心は安らかであり、彼は讃仰と哀惜のうちに息を引き取
る（2809-2816）。

『ベオウルフ』に見る主人公の部族集団に果たす役割、政治的使命の全うは
『ホーン王』に通ずる。英雄が部族に対して果すべき責任と使命、発揮すべき
指導力において、ホーンはベオウルフと同様の立場にある。異教徒の侵入によ
って国土が蹂躪され、国王である父親が殺害されて彼の国が存亡の重大な危機
に陥ったとき、未だ歳若いホーンは、国王の後継者として一族を救済する重責
を負うことになる。絶体絶命の窮地にありながらも、ホーンはこれを当然のこ
ととして受け入れる。異教徒たちはスッデンを支配下におさめたのち、ホーン
と彼の従者たちを溺死させる目的で舵のない小舟に乗せて大海原に放逐する¹⁶⁾。
従者たちが絶望し、悲嘆に暮れて自失する中で、ホーンただ一人が櫂を握って
船を操ることを試みる（118）。彼の行為は、宿命を背負った人間が、なおかつ
仮借ない運命に対抗して行なう挑戦である。幸運にも若者たちは難破すること
なくウェスターネス国に漂着するが、ホーンの胸に迫るのは故国に残った彼の
臣民とひそかに隠棲する母親への想い、そしていつの日か故国を回復するとの
決意である。彼は大海原へ返す小舟に異教徒の王への挑戦を託す。

“ Schup bi þe se flode,
Daies haue þu gode:
Bi þe se brinke,
No water þe nadrinke:
3ef þu cume to Suddenne,
Gret þu wel of myne kenne,
Gret þu wel my moder,
Godhild, Quen þe gode,
And seie þe paene kyng,
Jesu Cristes wiþering,

Ʒat iħc am hol and fer
 On Ʒis lond ariued her:
 And seie Ʒat hei schal fonde
 Ʒe dent of myne honde.”

(139-152)

「必ずこの手で奴に一撃喰らわせるぞ」(hei schal fonde/Ʒe dent of myne honde.) という復讐の誓いは、ウェスターネスを追われて行き着いたアイルランドの地で、偶然に遭遇した回教徒と戦い、その首領となっていた父の仇を、それと知らずしてではあるが倒すことによってまず部分的に果される(887-904)。一方でスッデンに残されたホーン一族においては、救済者到来の期待と願望が切実である。これは、異教徒の支配するスッデンの岸辺で、ホーン追放の日以来主君の帰国を信じて待ち続けていた忠臣(ホーンの忠実な従者アスルフ[Apluf]の父親)の言葉によって詩の中に塑及的に確認される。ホーンに期待される政治的使命はホーン自身にも一族にも自明のことであった。

And Ʒerof is wunder
 Ʒat he ne comeƷ to fi3te:
 God sende him Ʒe rizte,
 And wind him hider driue,
 To bringe hem of liue:
 Hi [Sarazins] slo3en Kyng Murry
 Hornes fader, king hendy.

(1330-1336)

この使命をホーンは異教徒からの祖国奪回という形で最終的に果たすことになる(1363-1378)。

このように『ベオウルフ』と『ホーン王』は、英雄とその一族同胞との間の緊密な関係における政治的テーマを共有する。しかしながら、主人公の死を結末に迎える『ベオウルフ』の終結部は『ホーン王』には無縁のものである。『ベオウルフ』終結部における主人公の死と葬送を中心に据えた三百四十余行では、死を悼む儀式を通して、ベオウルフと彼の一族との一体感の強化と、彼の偉業

の確認がなされる(3173-3182)。死と葬送は、儀式化されることによって、死そのものに収束することをやめて、逆説的に生の偉業を照射し、賛美する。人々の哀悼が深ければ深いほど、死に至った英雄の偉大さ、壮絶な戦いをよく戦った部族の英雄の栄光の生涯がよみがえり、称えられる。

このような死と葬送をもって生の栄光を見る『ベオウルフ』の視座は『ホーン王』には不在である。『ホーン王』は祖国奪回のもの、主人公の結婚と祖国への凱旋、そして王となったホーンへの神の加護の祈念で終わっている。ゲルマン詩に特徴的な英雄賛美は『ホーン王』に受け継がれたが、主人公の死は、結婚をもって終わるこの詩の恋愛の主題の力学の中には存立しえないものであった。

IV

ホーンは十二人の従者を従えていること、そしてそのうちの一人がホーンを裏切ることから、『ホーン王』に新約聖書中のイエス・キリストと十二使徒たちの物語との対応を読み取ることはたやすい。だが、その対応は極めて皮相的であり、宗教的寓意や、深遠な教義の伝達を意図したものではない。しかしながら、ホーンと従者たち、それにホーン一族がキリスト教徒であるという事実、そしてこの勢力が異教徒(回教徒)の集団と対決すること、これを物語の宗教性、あるいは宗教的テーマとするならば、これは政治的なテーマの背後にあって、それとわがち難く結びついていると言える。宗教的テーマはキリスト教徒を善、異教徒を悪として、善と悪、敵と味方、明と暗、の対比を物語の中に際立たせる。

回教徒を反キリスト的価値の代表と見て、キリスト教徒対回教徒の戦いを取りあげている作品は数多いが、中世イギリス文学に深い刻印を与えた作品は、中世アングロ・ノルマン語による武勲詩(chanson de geste)の傑作『ロランの歌』(*La Chanson de Roland*)である¹⁷⁾。『ロランの歌』は口承伝承にもとづく物語として、また英雄詩の伝統をひく物語として、前述の『ベオウルフ

フ』と共通点を持つが、特徴的なのはその濃厚な宗教色である。

『ロランの歌』はフランス国王シャルルマーニュ (Charlemagne) の第一の猛将ロラン (Roland) が、義父であり、また同僚騎士でもあるガヌロン (Guenelun) と敵対して恨みを買ひ、後者が裏切りの計略を設定する過程と、待ち伏せた回教徒と戦って、死をもってシャルルマーニュを守ったロランの武勲、そして彼の死後ロランの死の責任を問うシャルルマーニュとガヌロンの争いをめぐる顛末を歌った全編四千余行の長編詩である。オックスフォード写本の『ロランの歌』は、1100年頃に成立したとされるアングロ・ノルマン語による作品であるが、物語そのものは西暦778年頃に起きた史実上の事件に取材している。この詩は武勲詩のなかでも特にキリスト教的な主題を中心に据えた作品であって中世文学に直接的で広く多大な影響を与えた¹⁸⁾。『ロランの歌』をキリスト教的観点から見れば、それは戦うキリスト像、聖人的英雄像の原型を提供するという意義をもつと言えよう¹⁹⁾。

『ロランの歌』は、大きく三部に分かれる。第一部はガヌロンとロランの、怨恨にもとづくいさかい (1-341) と、この結果回教徒のもとへ使者として派遣されたガヌロンがロランを討つべく回教徒と密約をかわすまで (342-724) が歌われる。第二部ではシャルルマーニュの後衛部隊を指揮するロランが、ガヌロンの計略によって回教徒の急襲を受け、極端な劣勢のもとで戦いを続け、ロランが朋友オリヴィエ (Olivier) とともに壮絶な最期を遂げ、ロランの危機を知って引き返したシャルルマーニュが敵を蹴散らすまでを描く (725-2569)。第三部にはシャルルマーニュのサラゴサ攻略 (2570-3657) と、それに続く法廷を舞台にした、裏切り者ガヌロンと皇帝シャルルマーニュとの対決と裁きの行方が展開される (3658-4002)²⁰⁾。

『ロランの歌』は武勲詩の最高傑作とされる。これは、一行十音節からなり各行末に類音 (assonance) を整えた詩聯の処理、素朴だが力強い叙述と、登場人物の性格づけ、劇的效果設定の巧みさ、などにおいてそれまでの詩を陵駕しているからである。特に主要登場人物の人物造形は、各々についてそれぞれの

内面の葛藤を描き出すことによっていきいきとしてすぐれた性格づけがなされている²¹⁾。さらに『ロランの歌』には、夢見による伏線の設定とその実現が繰り返され、この反復構造が詩の展開に律動と緊張とを与えている。

上記の文学的彫琢はキリスト教の世界制覇というすべてを圧倒し、統括する使命によって動機づけられる。シャルルマーニュもロランも、すぐれて個性的な描写を与えられるが、究極的にはキリスト教勢力の世界制覇の手先にすぎない。ガヌロンの奸計に遭って、圧倒的な勢力の回教徒を前にしたロランは味方の戦士たちを鼓舞する。

“Seignurs baruns, Carles nus laissat ci;
Pur nostre rei devum nus ben murir.
Chrestientet aidez a sustenir! . . . ”²²⁾

(1127-1129)

また第二部の終末で、裏切りに倒れたロランの復讐を神に誓ったシャルルマーニュは、祈りがかなって、沈みかかる夕日が静止し、夜闇の到来を遅らせるという奇跡をうけ、神の助力を得てサラゴサ攻略を果す(2458-2481)。

ロランを陥れる罠を仕掛けた張本人であるガヌロンとシャルルマーニュの対決は、法廷の場に持ち込まれるが、議論尽くした双方は、裁判の結果を神明裁判である決闘で決せざるをえなくなる。結局人は人を裁ききれず、究極の裁きは神の決断に委ねられなければならないのであった。シャルルマーニュ側はチエリー(Thierry)、ガヌロン側はピナーベル(Pinabel)を立てて神意を問う決闘となる。

Del brant d'acer la mure li presentet,
Desur le frunt li ad faite descendre,
Parmi le vis . . .
La destre joe en ad tute sanglente,
L'osberc desclos josque par sum le ventre.
Deus le guarit, que mort ne l'acraventet.

[Tierris] Fiert Pinabel sur l'elme d'acer brun,

Jusqu'al nasei li ad fait e fendut,
 Del chef li ad le cervel expandut,
 Brandit sun colp, si l'ad mort abatut.
 A icest colp est li esturs vencut.
 Escrient Franc: "Deus i ad fait vertut!
 Asez est dreiz que Guenes seit pendut
 E si parent, ki plaidet unt pur lui." AOI²³⁾

(3918-23, 3926-3933)

『ロランの歌』の英雄像は『ベオウルフ』におけるそれと共通するものがある。ただし、『ベオウルフ』における英雄と超自然的怪物たちの闘争は、ここにおいてはキリスト教徒と回教徒の対決となる。回教徒たちはグレンデルと同様に、強大で、獰猛、破壊的な悪の力、負の力の具現である。だが、それは伝説上、想像上の超自然の怪物ではなく、中世ヨーロッパ世界における現実の脅威であり、キリスト教の宿敵とされた回教徒である。一方、シャルルマーニュとロラン、オリヴィエたちはキリスト教勢力を代表する善の力、正の力の具現となる。善と悪、正と邪が鋭く対立する『ロランの歌』は、キリスト教的英雄詩と呼ぶことができよう。主題の設定の規模においては、キリスト教を作品の中心に据えた『ロランの歌』は『ベオウルフ』をはるかに陵駕している。シャルルマーニュはゲルマンの一部族長をはるかに超える存在であり、ヨーロッパ世界に冠たるキリスト教国の盟主である。ロランはその第一の勇将である。彼らの勝利は、たんに一部族の他に対する勝利を意味するのではなく、全世界的な規模における、キリスト教の回教に対する勝利を意味する。したがって『ロランの歌』の勝利と栄光を『ベオウルフ』の勝利と栄光と同列に並べることはできない。

『ロランの歌』の世界は、終始人知を越えた力によって支配されている。ここではロランはむろんのこと、シャルルマーニュですらキリスト教の世界制覇の手先であり道具である。キリスト教の世界制覇が成就されない限り、キリスト教の戦士に休息の時はない。シャルルマーニュの使命は、目前の回教徒を駆

逐し終えたときに終わるのではない。歌の結末部、ガヌロンの処刑を終え、戦いと裁きに疲れ果てて床につき、やっとまどろみかけたシャルルマーニュに、大天使ガブリエルは次に皇帝が果すべき任務を告げる。命あるかぎりシャルルマーニュに心からの安息の訪れはない。

...

Passet li jurz, la nuit est aserie.
 Culcez s'est li reis en sa cambre voltice.
 Seint Gabriel de part Deu li vint dire:
 "Carles, sumun les oz de tun emperie!
 Par force iras en la tere de Bire,
 Reis Vivien si succuras en Imphe,
 A la citet que paien unt asise;
 Li cherestien te recleiment e crient."
 Li emperere n'i volsist aler mie:
 "Deus," dist li reis, "si penuse est ma vie!"
 Pluret des oilz, sa barbe blanche turet.²⁴⁾

(3991-4001)

このように、キリスト教は『ロランの歌』の主題となり、物語の展開に必然性を提供する。だがシャルルマーニュ大帝と彼を中心として活躍する戦士たちの戦功、回教徒の攻撃に対するキリスト教封建諸侯の奮戦を通じて、キリスト教徒が遵守すべき徳目や教義を伝えることは詩の目的ではない²⁵⁾。キリスト教は英雄たちの活躍に異教徒征伐という単純明解な論理を提供して、物語の中に二つの勢力を色分けし、キリスト教徒と異教徒との対決の動機を提供する。キリスト教がシャルルマーニュやロランに与える行動の規範は、異教徒を蹴散らす「戦うキリスト」となることであり、詩の目的はキリスト教戦士の理想像を作り出すことであつた。キリスト教対回教の闘争という大きな主題のもとで、キリスト教倫理は、『ベオウルフ』におけるゲルマン的部族意識と同様に機能し、英雄と彼を奉じる集団とを結びつけ、戦士意識を高揚させ、回教徒に対決する側の勢力の行動に合理性を与える機能を果している。

これに加えて『ロランの歌』においては、封建的主従関係がロランの戦場で

の使命感を高揚させている。これは『ベオウルフ』には存在しない。ロランは回教徒と対決して、キリスト教世界を守る英雄としての期待を彼の所属する集団から担う一方で、封建的主従関係から生じる義務をシャルルマーニュに負っている。かくして戦いの場でロランを直接的に駆り立てるのは、戦うキリスト教戦士としての使命感、彼の所属する集団からの期待に加えて、シャルルマーニュへの忠誠と義務の遂行である。ロンスヴォーの谷間で毘にはまったことに気づき、生死を賭けた戦いが不可避に迫っていることを知ったロランが味方の騎士たちを鼓舞する言葉は彼の立場をよく表明している。

“ Li emperere, ki Franceis nos laisat,
 Itels .XX. milie en mist a une part,
 Sun escientre, n'en i out un cuard.
 Pur sun seignur deit hom susfrir granz mals
 E endure e forz freiz e granz chalz,
 Sin deit hom perdre del sanc e de la char.
 Fier de ta lance e jo de Durendal,
 Ma bone espee, que li reis me dunat. . . .”²⁶⁾
 (1114-1121)

戦い進んで絶体絶命の窮地に追いやられる戦況の中で、角笛を吹くか否かの選択を迫られるロランの、軍団の統率者として配下の生命を預かる重圧と、本隊の援助を呼ぶことでの個人的な名誉失墜のおそれの間での、内的葛藤が活写される。この絶望的な状況の中でロランが示す、逆境を突いてなお前進しようとする不屈の気迫は、主人公個人の英雄精神の現出としての迫力を備えて物語の文脈から立ち上がり、『ベオウルフ』の英雄精神と呼応する。しかしながら、各々の英雄の背後にある共同体集団と、戦いの動機を考慮に入れる時、二人の英雄の戦いの持つ意味は全く異なった性質のものとなることを再度確認しておかなければならない。

『ホーン王』はこの『ロランの歌』と本質的に共通した宗教的テーマを持つ。キリスト教徒と回教徒との対立は『ホーン王』の基調となるテーマであり、物語

の展開と登場人物の行動を動機づける。冒頭でホーンの母国スッデンに侵入するのは回教徒であり、彼等は国土を蹂躪する。彼らの侵入の意図は明白である。

“ Ði lond folk we schulle slon,
And alle þat Christ luueþ vpon,
And þe selue riȝt anon,
Ne schaltu to-dai henne gon.”

(43-46)

ホーンにとって回教徒はまた父の仇でもある。ホーンと回教徒の対決は物語の大きな枠組を作りあげ、ホーンの成長のいわば試金石というべき試練を提供している。少し先走るが、物語を俯瞰してこのことを確認すれば、侵入した回教徒(35-88)は、最終的にホーンによって駆逐される(1371-1378)。破壊された教会(churchen forto felle)(62)は、祖国奪回後に再建される(Horn let wurche/Chapeles and chirche;/He let belles ringe/And masses let singe.)(1379-1382)ことになる。この間にも、ホーンは漂着先のウェスターネスと追放先のアイルランドで一度ずつ回教徒と戦い(595-624, 849-884)、アイルランドでの戦いでは父の仇を倒す。これに加えて、ホーンの帰還を待ち続ける騎士(従者アスルフの父)が意志に反して異教徒に服従しながらも楯に十字架を飾って、ひたすらホーンの帰国を信じて待ち続けていたという事実(1289-1346)、ホーンの母親ゴドヒルドが岩穴に隠れて(71-78)最後に救出される(1383-1387)まで、ホーンの無事とホーンへの神の助力を祈り続けている(Eure heo bad for Horn child/Ðat Jesu Crist him beo myld.)(79-80)という二つの事実は、物語の終末近く、すべての秩序が回復される時点で明らかになるのであるが、これらは、物語の大きな枠組を再確認させるとともに、その底流に不断に流れる宗教性を遡及的に確認させ、簡素で明解なキリスト教的倫理観を『ロランの歌』と同様に、この作品に与えている。

以上検証したように宗教性は『ホーン王』において重要な機能を果している。しかし、だからといって『ホーン王』では、『ロランの歌』のようにキリスト

教が他のすべての価値に優先される至上性をもつのではない。『ロランの歌』におけるキリスト教価値観の拘束力は、登場人物個々人の自由な意志決定を拒絶するまでに強い。それは、『ロランの歌』がキリスト教の世界制覇を究極の目標としているためである。だが『ホーン王』においては、行動の主体性はあくまでもホーンにある。ホーンには故国スッデン以外の土地をわがものにしようとする意志はない。ホーンの本意は、回教徒駆逐とキリスト教王国復活を普遍的な規模で行うことにあるのではなく、故国スッデンの回復、そして次章で検討するが、リメンヒルドの愛の獲得にこそあるからである。荒海へ放逐された後、ウェスターネスに漂着したホーンの誓いは、彼の生涯変わらない決意を端的に表すものであった(139-152)。このようにして『ホーン王』においては、『ロランの歌』に見るキリスト教的価値観が、『ベオウルフ』に見る英雄の使命、ゲルマン武人の理想的英雄像と調和し、またそれを補強し、支える主題となっている。

V

このように『ホーン王』の政治的、宗教的主題は詩の骨組みを決定し、物語の展開に大きな方向づけを与えるが、その中に新たにもう一つの異なる次元の意味を加えるものは恋愛の主題である。これは、主人公二人が体験する試練に、前二者の主題によるのとは異なる新たな意味を与え、それによって主人公二人の主体的な行動を動機づけ、そうして創出された新たな行動が前二者の主題と調和した意味を持つことになる。ふり返れば、この男女間の恋愛の主題は、『ベオウルフ』にはまったく存在しないものであった。『ロランの歌』にはロランと婚約者オード姫の関係に非常に希薄な形で存在するが、中心的な主題を形成しうるものでは決してない²⁷⁾。『ホーン王』における恋愛の主題は中世フランスにおいて発達したロマンスの影響を反映するものである。イギリスには十二世紀中葉以来、このロマンスの伝統が直接的に流入してきていた。そしてこれは中世イギリス文学全体に強くその痕跡を刻むことになる。ロマンスの起

源と発生の詳細にまでさかのぼる考察はここでは控えるが、『ホーン王』の恋愛の主題を考えるにあたって、南フランスに恋愛詩として発生し、北フランスで完成されたロマンスの特質、特に大成者であり最も影響力の強かったクレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) のロマンスの特徴について概観しておかなければならない。

クレチアンは、上流支配者階級の男女関係の諸相を主題として、優れた物語詩を作り上げた。また彼は騎士道の概念を、文学という媒体を通して確立させた作家でもある。彼のロマンスは元来ケルトの伝承であるアーサー王宮廷を舞台に繰り広げられ、英国を含む周辺諸国の文学に絶大な影響を与えた。特に彼の「ランスロ、あるいは車上の騎士」(“Lancelot ou le chevalier de la charrette”, 以下「ランスロ」と省略)(1177-81年頃)は、彼と同じくジャンパーニュ伯夫人マリの宮廷に仕えた司祭アンドレによって教条化された「宮廷風恋愛」理論書『愛について』(*De Amore*)の、物語詩への応用ともいうべき作品である。

この「ランスロ」はアーサー王物語をはじめとする後世のロマンスに多大な影響を与えた作品であったが、中世初期のイギリスのロマンスへの影響を考慮するときには、「ランスロ」以外の作品におけるクレチアンの恋愛観も十分に考慮する必要がある。そこでまず「ランスロ」から始めて、クレチアン・ド・トロワの恋愛観を彼の主要作品の中で考察することにしよう。

「ランスロ」はクレチアンの創作になる部分(約6000行)は未完のままであって、現存する詩はゴドフロワ・ド・レギ (Godfroi de Leigni) なる人物が末尾の約千行を書き加えたものである。この作品はアーサー王宮廷第一の騎士ランスロとアーサー王妃グェニエーヴル (Guenievre) の密通をあつかう物語で、典型的な「宮廷風恋愛」の書として知られている²⁸⁾。悪徳騎士メレアガン (Meleagant) にかどわかされたグェニエーヴルを救出しようとするランスロは大変な苦難の末にようやく敵の城にたどりつくが、馬を倒されてしまい、城に入るために荷馬車に乗らなければならなくなる。当時荷馬車は罪人を運ぶため

に用いられていたもので、これに乗ることは騎士にとって限らない恥辱を意味した。ランスロは一瞬逡巡するが意を決してこれに乗り込み、城に入り、グェニエーヴルの救出を果す。だがその過程でランスロは移り気なグェニエーヴルに残酷なまでに翻弄される。彼女はランスロがメレアガンと決闘しているさなか、戦いを一方的に止めるよう彼に命じる。この言葉がグェニエーヴルの口から発せられるやいなや、ランスロは瞬時に戦いを休止し、メレアガンの剣に打たれるままとなる。彼にとってグェニエーヴルの言葉は絶対である。

La parole oï Lanceloz :
 ne puis que li darriens moz
 dela boche li fu colez,
 puis qu'ele ot dit: " Quant vos volez
 que il se taigne, jel voel bien ",
 puis Lanceloz, pur nule rien,
 nel tochast, ne ne se meüst,
 se il ocirre le deüst.
 Il nel toche ne ne se muet; ²⁹⁾

...

(3805-3813)

救出されたグェニエーヴルはランスロに感謝するどころか、ランスロが荷馬車に乗り込む際に見せた一瞬の逡巡を鋭くとがめて、彼女の救い主にねぎらいの言葉をかけることもしない。ランスロはグェニエーヴルのこの残酷な仕打ちにもひたすら忍従するのみである。

...
 se li respont molt belemant
 a meniere de fin amant :
 " Dame, certes, ce poise moi,
 ne je n'os demander por coi."
 Lanceloz molt se demantast
 se la reïne l'escoutast ;
 mes por lui grever et confondre,
 ne li vialt un seul mot respondre,
 einz est an une chanbre antree.³⁰⁾

(3961-3969)

この「ランスロ」はクレチアン・ド・トロワが、庇護者であるマリ・ド・ジャンパーニュの依頼で書いたものとされているが³¹⁾、女性への屈辱的といえるほどの従属を騎士に強いるこの物語は、作品冒頭の前書にあるように、クレチアンの庇護者であるマリ・ド・ジャンパーニュの依頼によるものであって、この作品の創作は、どうやらクレチアンの本意ではなかったというのが真実のようである³²⁾。むしろ、作者クレチアン本来の恋愛観は、彼が自ら完成した初期の作品、「エレックとエニード」(“Erec et Enid”)や「クリジェ」(“Cligés”)の中に表明されていると考えられる。それではクレチアンのロマンスにおける彼本来の恋愛の主題とはどのようなものであったのだろうか。それを、初期から「ランスロ」に至るまでの彼の作品の中に拾ってゆきたい。

「エレックとエニード」(1170年頃)は六千九百行余りの詩であるが、この作品は騎士道の抱える潜在的な葛藤を主題にして、この葛藤が騎士エレックとその妻エニードの夫婦愛に昇華される成長の過程を描いたものである。若き妻エニードへの愛に溺れて騎士としての本分を忘れかけた騎士エレックが、妻をうながして彼女と共に遍歴の旅にでかけ、妻と協力しあって数々の困難を切り抜け、騎士として成長し、かつ夫婦愛をより一層堅固なものにして宮廷に帰る、というのが物語の概略である。この物語詩においてクレチアンが提出しているのは、騎士道と夫婦愛の両立、騎士としての義務と結婚生活における妻への情熱とをどのように両立させるかという問題である。彼は結論として、夫が騎士道に邁進できるよう妻が積極的な啓発と協力を行うことが唯一の解決策であることを物語の中に示している³³⁾。クレチアン自らが詩の冒頭で語っているように、こうした結論をもつこの作品はクレチアンの自信作でもあった。

...
d'Erec, le fil Lac, est li contes,

...
Des or comancerai l'estoire
qui toz jorz mes iert an mimore
tant con durra crestiansz ;

de ce s'est Crestiens vantez.³⁴⁾

(19, 23-26)

「エレックとエニード」に続く作品「クリジェ」(1176年頃)は、巷間に流布していた『トリスタン』物語の主題である姦通恋愛を真っ向から否定する物語で、「反トリスタン物語」と言うことができる³⁵⁾。「クリジェ」が扱うのは、老いた叔父とその若き妻、そして彼女に恋する甥の若い騎士という三角関係である。これは『トリスタン』の設定とまったく同一である。だが「クリジェ」は、『トリスタン』におけるように結婚のらち外の姦通恋愛をつらぬいた果てに、死をもって若い恋人たちの現世における葛藤に解決をつけるのではない。主人公クリジェが叔父の妻である恋人フェニス (Fenice)³⁶⁾ と結ばれるのは、彼女が毒薬(仮死状態になる薬)をあおり、一旦死んで結婚の絆より解き放たれて後のことである。

...
 La poison a boivre li done.
 Et lors des qu'ele l'ot beüe,
 Li est troublee la veüe,
 Et a le vis si pale et blanc
 Con s'ele eüst perdu le sanc,
 Ne pié ne main ne remeüst,
 Qui vive escorcher la deüst,
 Nel ne se crosle ne dit mot.

...
 Fenice est an la sepulture,
 Tant que vint a la nuit obscure,³⁷⁾

... (5706-13, 6079-80)

この物語においても、「エレックとエニード」同じく、結婚のらち外での男女間の親密な関係を、クレチアンは容認しようとはしない。この作品の次に、「ランスロ」とほぼ同時期に製作されたとされる「イヴァン」(“Yvain”) (1177-81年頃)においても、クレチアンは、主人公の騎士が、失った妻の愛

を取り戻し幸福な結婚生活に戻るという主題を展開する。

このように、「ランスロ」に至るまでの作品を通して表出されたクレチアンの恋愛観、恋愛の主題は、「ランスロ」のそれとは大いに異なるものであった。これらの初期の作品における恋愛の主題の特徴は、恋人である女性も騎士と同様に騎士道を習練する試練の過程に直接、間接に参画すること、騎士の側からすれば、愛する女性への愛の成就への努力が同時に騎士道修業達成に資すること、に特徴がある。その過程においては、騎士ばかりでなく彼女自身も様々な試練を受けることになり、おのおのが課せられた試練によく耐え成長したとき、騎士としての名誉を得ると同時に幸福な結婚生活が確立して二人の安定した生活が実現されるというものである³⁸⁾。

『ホーン王』の恋愛観は上に見たクレチアン本来の恋愛観に共鳴するものである。『ホーン王』では、ホーンとリメンヒルドの恋愛は双方の成長を促すきわめて重要な要因となっている。二人の愛は多くの試練と困難の克服なしには成就しない。まずリメンヒルドはウェスターネスの宮廷に保護されたホーンを見初めるやいなや、激しい恋におちる(245-264)。リメンヒルドは執事のアセルブルス(Apelbrus)に命じてひそかにホーンを私室へと呼び寄せ、思いを打ち明けようとする。だが、二人の逢瀬はたやすく実現しはしない。若い二人の不始末を懸念するアセルブルスが、リメンヒルドの真意を探るためにホーンの忠僕で友人であるアスルフをホーンに変装させてリメンヒルドのもとに行かせるからである(275-294)。だまされたことを知ったリメンヒルドは激怒するが、アセルブルスが改めてホーンを連れて来るととりなしてその場は機嫌を直す(321-336)。ホーンとの逢瀬がかなったリメンヒルドは、ホーンに熱い胸の内を打ち明ける。愛の告白を受けたホーンがリメンヒルドに示す態度は、宮廷風恋愛の型を踏襲していて興味深い。リメンヒルドの告白をうけると、ホーンは自分は卑賤の生まれである、と素性を隠し、彼女の好意は自分の身に余るとしてリメンヒルドの自分への好意を一旦退ける。

“Ihc am ibore to lowe
 Such wimman to knowe.
 Ihc am icode of þralle
 And fundling bifalle.
 Ne feolle hit þe of cunde
 To spuse beo me bunde:
 Hit nere no fair wedding
 Bitwxee a þral and a king.”

(417-424)

リメンヒルドが重ねてホーンの好意を懇願すると、彼女の愛情の強さを確認したホーンは、自分はリメンヒルドを得るにふさわしいものとなることが必要であると自ら語り、まず騎士に叙任されることを希望する(433-442)。ホーンは騎士叙任の儀式を、リメンヒルドとアセルブルスの助力によってエイルマー王から受けることになる。この場合の騎士叙任は、他の中世ロマンスに見るような、傑出した武勇が認められたのちに行なわれる儀式ではないが、ホーンの力量についてはエイルマー王もすでに十分にその実力を認めている³⁹⁾。

þe King sede sone,
 “þat is wel idone;
 Horn me wel iquemep
 God kniȝt him bisemep.
 He schal haue mi dubbing,
 And after, wurþ mi derling.

(483-488)

しかしながら、ホーンは騎士にふさわしい力量が自分に備わっていることを、自他共に納得できる形で証明できるまでは、自分がリメンヒルドの愛を受けるにふさわしいものとは考えない。早急に結婚の儀をとりおこなうように迫るリメンヒルドをなだめて、ホーンは彼の意図を伝える。

“Rymenhild,” quap he, “beo stille:
 Ihc wulle don al i wille:
 Also hit mot bitide.
 Mid spere i schal furst ride,

And mi kniȝthod proue,
 Ar ihc þe ginne to woȝe.
 We beþ kniȝtes ȝonge,
 Of o dai al isprunge;
 And of vre mestere
 So is þe manere:
 Wiþ sume oþere kniȝte
 Wel for his lemman fiȝte
 Or he eni wif take:
 . . . ”

(541-553)

おりしもウェスターネスに回教徒が侵入してくる。ホーンはこれに戦いを挑み、めざましい活躍をおさめて自他に誇れる武勲をあげる。ホーンはこれを、戦士としての自分の力のほどを示す機会とすることができた (595-644)。彼は首領の首をエイルマーのもとへ持ち帰り、騎士叙任の返礼とする。

“ . . .
 þat heued i þe bringe
 Of þe maister-kinge.
 Nu is þi wile i ȝolde,
 King, þat þu me kniȝti woldest. ”

(641-644)

二人はこうして相愛の仲となるが、二人の愛はさらに数多くの困難なしには成就しない。クレチアンが初期の作品において説いたように、性急な愛は時間と忍耐によって鍛えられねばならないのである。ウェスターネスでの二人の幸福な状態は長くは続かない。十二人の従者の一人フィケンヒルド (Fikenhild) の裏切りによって二人は別離を余儀なくされる。ホーンが回教徒と戦ったその夜リメンヒルドは、ホーンが宮廷内部の裏切りにあって追放されることを夢見て気がふれんばかりになる (Also he were of witte) (652)。これは即刻現実のものとなる。ホーンを妬むフィケンヒルドが、エイルマー王に、ホーンとリメンヒルドがひそかに深い関係にあると讒言するのである。彼の言葉を信じて激怒する王は、ホーンを散々に罵ったあげくに宮廷から追放してしまう (707-

714)。ホーンはアイルランドに逃れ、その地の王に手厚くむかえられて七年間を過ごす。その間に彼は異教徒と戦い、戦士としての力量と名声をいっそう不動のものにする(799-886)。

一方でリメンヒルドも、ホーンへの激しい熱情をなだめつつ、ホーンの不在中の危機によく耐える。彼女はまずモーディ王(Modi)からの強引な求婚に耐えることで、ホーンへの愛情と信頼の強さを示す(921-930)。リメンヒルドの遣わした使者によってホーンは彼女の窮状を知る(940-958)が、この使者は溺死体となってリメンヒルドのもとに漂着し、彼女はホーンからの助けはおろかホーンの生存も絶望と思い込む(973-980)。そればかりかりリメンヒルドはホーン自身によって試練を課せられることになる。ホーンはひそかに帰国し、巡礼に身をやつして城内に入り、モーディ王が催したリメンヒルドとの婚礼の末席に座って、酒杯を運ぶリメンヒルドを呼び寄せ、彼女がホーンに贈った指輪を見せ、船旅の途中に自分がホーンの臨終をみとったと告げる。

“ I fond Horn child stonde
 To schupeward in londe.
 He sede he wolde agesse
 To ariue in Westernesse.
 Þe schip nam to þe flode
 Wiþ me and Horn þe gode;
 Horn was sik and deide,
 And faire he me preide:
 ‘Go wiþ þe ringe
 To Rymenhild þe 3onge,’
 Ofte he hit custe,
 God 3eue his saule reste!”

(1179-1190)

リメンヒルドはホーンが片時もはずさないと約束した指輪を目の前に突きつけられて、ホーンの死を確信し、自分も後を追おうと隠し持っていた短刀を抜くが、ホーンに押し止められる(1195-1202)。ホーンはこうして彼女のホーンへの変わらぬ愛情と貞節を確認した後に正体を明らかにして(1203-1298)、執拗

な求婚者モーディ王を倒してリメンヒルドを解放し、彼女の苦勞と信頼にこたえるのである(1208-1246)。ホーンの帰還とリメンヒルドの救出が知れると宮廷はわきかえり、二人の婚礼の準備がなされる。ホーンは婚礼の席で、リメンヒルドとの関係は潔白であったことをエイルマー王に宣言し、王の誤解を解く。しかしながら、ホーンとリメンヒルドの試練はこれで終わるのではない。ホーンはさらに自分自身に試練を課す。彼は結婚の床入りは祖国奪回を果して騎士としてのさらなる力量を証明し、さらに父親の遺産と所領を奪い返して王となって後に行なうと宣言する。

“ . . .

Ʒu wendest þat i wroʒte
 Ʒat y neure ne þoʒte,
 Bi Rymenhild for to ligge;
 And þat i wiþsegge.
 Ne schal ihc hit biginne
 Til i Suddene winne.
 Ʒu kep hure a stunde,
 Ʒe while þat i funde
 In-to min heritage,
 And to mi baronage,
 Ʒat lond i schal ofreche,
 And do mi fader wreche.
 I schal beo king of tune,
 And bere kinges crune;
 Ʒanne schal Rymenhilde
 Ligge by þe kinge.”

(1273-1288)

この宣言はホーンに今一度の試練の場を提供するが、そればかりでなく、リメンヒルドにとってもこれは、ホーンの不在に乗じて正体をあらわしたフィケンヒルドにかどわかされ、監禁され、彼女のホーンへの愛の強さを今一度試される試練となる(1390-1406)。祖国スッデンに渡り、この国の奪回を果した後にホーンはフィケンヒルドの裏切りを夢に見る。急ぎウェスターネスに帰りつい

たホーンとその配下は、リメンヒルドの窮状を確認して、旅の楽師の一団に変装し、難攻不落の城の中に入り、正体を現わして戦いの末にフィケンヒルドを倒してリメンヒルドを救出する(1436-1492)。

上述したホーンとリメンヒルドの試練の過程をまとめると以下のようになる。

ホー　　ン	リメンヒルド
1. 回教徒の一軍がスッデン国に侵入し国土を蹂躪する。ホーンは父を殺され、祖国より追放される。(29-123)	1. ホーンを見初めて激しい恋に陥るが、ホーンとの逢瀬がかなわない。(248-332)
2. ウェスターネスで騎士に叙任されたホーンは武勇の証明に回教徒と戦い、勝利をおさめる。(597-623)	2. 大魚が網を破る悪夢に苦しむ(これはフィケンヒルドの讒言によってホーンが追放され、彼女のもとを去ることの徴である)。(651-664)
3. フィケンヒルドの讒言により、ホーンはリメンヒルドとの仲を王に誤解されてウェスターネスを追放される。(687-750)	3. ホーンの不在中に隣国のモーディ王から強引な求婚をうける。(923-929)
4. ホーンは行き着いたアイルランドの地で回教徒の巨人を倒し、父の死に報いる。(799-886)	4. ホーンに危機を告げるために派遣した使者が溺死して漂着し、ホーンの死を信じて、悲しみに打ちひしがれる。(933-980)
5. ホーンの不在中にモーディ王がリメンヒルドに強引に求婚したことを知り、帰国してリメンヒルドを救出する。(981-1086, 1221-1246)	5. 変装して帰還したホーンが、リメンヒルドの忠実さを試すために、ホーン自身の死を告げ、これを信じたリメンヒルドは悲しみの余り自らの命を絶とうとする。(1163-1202)
6. ホーンは祖国スッデンに帰還し、戦いの末に異教徒を駆逐する。(1289-1386)	6. ホーンの遠征中にフィケンヒルドにかどわかされ、城に監禁され、凌辱されそうになる。(1389-1406)
7. フィケンヒルドを倒し、リメンヒルドを救出する。(1407-1492)	

このように『ホーン王』においては、クレチアン・ド・トロワの初期の作品がそうであったように、戦士としての卓越性と恋人への愛は、一方が他方に働きかけて交互に成長し強化され、葛藤を超越する。すなわちホーンとリメンヒル

ドの間では、一方に課せられた試練が同時に他方の試練を提供することになる。すなわちホーンとリメンヒルドは相互に試練を耐え、その過程においてホーンは騎士としての力量、一族の指導者としての適格性を証明してゆき、他方、リメンヒルドは試練の過程をへて彼女の忍耐力と貞節を証明することになる。さらに彼女の当初の激しく性急なホーンへの思慕は、次第に持続性のある、しなやかで強靱な愛情へと鍛えられてゆくことになるのである。『ホーン王』の恋愛の主題は、男女の恋愛の自然な発達と展開を描くものであって、それはクレチアンの「ランスロ」やアンドレアスによって、高度に洗練され、ぎこちないまでに教条主義化する以前のロマンスの恋愛の主題の伝統を受け継ぐものといえる。

VI

以上考察したような政治的・宗教的・恋愛の主題の三つの主題は、『ホーン王』において相互に緊密に関連しながら展開している。ホーンの祖国奪回の過程は、同時にキリスト教徒対回教徒の戦いでもある。また、回教徒との戦いと祖国奪回の戦いは、同時に恋愛の主題における主人公二人に成長の場を提供している。視点を変えれば、恋愛の成就是多くの冒険と試練を必要とし、それらを求める主人公の強力な働きかけが政治と宗教の主題を展開する原動力になると見ることもできる。これら三つの主題、ゲルマン詩からの政治的、武勲詩からの宗教的、そしてロマンスからの恋愛の主題は、それぞれが『ホーン王』以前、あるいは同時代の物語詩の伝統の上に立脚しているものである。『ホーン王』の詩人はこれらの異質な主題を有機的に結合させて一つの詩に完成することに成功している。政治的、宗教的・主題を中心として展開するゲルマン、フランスの英雄詩と、恋愛の主題の強く入り込んだロマンス——これら複数の主題のからみあいは『ホーン王』の中の一つ一つのエピソードに、一方でロマンス的な恋愛と冒険、他方で英雄詩的な民族意識、英雄賛美という重層的な意味を賦与する。

このように、『ホーン王』を成立させるものは、ゲルマン的な英雄詩の伝統世界と、キリスト教の洗礼を受けた武勲詩の伝統、大陸フランス文化の流入による文学の洗練、特に男女間の恋愛を主題としたロマンスの伝統であった。そしてそれらを統合した伝統の新たなる担い手としての英語を操る知識階級の台頭、伝統を融合して詩的作品とすることができるだけの伝達手段としての英語の成熟、そしてこれらの集約としての当時の社会、文化的状況であった。民族の英雄賛美、あるいは宗教的プロパガンダの意図をもって歌われた英雄詩と、北フランスの宮廷を中心として発達したロマンスとの融合が、『ホーン王』において可能となった。ノルマン・コンクエストより百五十年余りたち、奔流となって流入した大陸からの言語と文化はようやく英国においてその結晶を結ぶまでに熟成した。そこにおいて古い伝統的な主題に新しい主題を加えて、これまでになかった詩的世界が作り上げられたのだった。古い伝統的なものと新しい革新的なものとの混在から融合へ進みつつあった時代。『ホーン王』はこの時代の時代精神の体現と言えよう。

注

- 1) *Cursor Mundi* は十三世紀末に成立したと考えられている。序章に英語の国語意識の、短いが力強が表白がある。“þis ilke boke is translate/In to englisshe tonge to rede/For þe loue of englisshe lede/For comune folk of englonde/Shulde þe bettur hit vndirstonde . . . (Prologue, ll. 232-236). Richard Morris (ed.), *Cursor Mundi* (London: EETS, 1874).
- 2) ロマンスとは何かを性格に定義することは容易ではない。語そのものは、「ロマンス語(ラテン語に対する地方語 = vernacular)で」を意味する中世ラテン語の副詞，“romanice”に由来する。十二世紀初頭から特に北フランスにおいて、それまでの聖者伝や武勲詩の伝統に、南フランスに起源を持つ恋愛詩の要素を加えて新しい物語詩が生まれた。本稿では特に十二世紀半ばから北フランスで創作された、騎士の冒険と恋愛を主題とした韻文物語詩をロマンスと呼ぶことにする。Cf. E. P. Ker, *Epic and Romance: Essays on Medieval Literature* (1896; rpt. New York: Dover Publications, Inc., 1957), pp. 4, 33.
- 3) 上掲の *Cursor Mundi* の他にも、十三世紀にはラヤモン (Layamon) が、英

- 国の建国以来の歴史を扱う書 *Brut* を著わした (1220年頃)。これは Geoffrey of Monmouth のラテン語による *Historia Regum Britanniae* (1136年頃) を、Wace がフランス語に翻訳したもの (1155年頃) の英語への翻訳である。
- 4) Donald B. Sands (ed.), *Middle English Verse Romances* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1966), p. 15.
- 5) 内容分析にかかわる主たる研究としては、ホーンの性格の中に戦士と恋人との二重性を読み取り、これが物語の他の登場人物に象徴的に投影されているとする、D. M. Hiller, "An Interpretation of *King Horn*." *Anglia* 75 (1957), pp. 157-172., 作品を、航海によって分断される四つの部分に分けて、それぞれに筋と構造と主題の反復を見る。Georgianna Ziegler, "Structural Repetition in *King Horn*" *Neuphilologische Mitteilungen* 81 (1980), pp. 403-408., がある。作品の概括的な解説は Deiter Mehl, *The Middle English Romances of the Thirteenth and Fourteenth Centuries* (London: Routledge & Kegan Paul, 1969), pp. 48-56. を参照。
- 6) 『ホーン王』からの引用はすべて次の版により、() 内に行数のみを記す。Walter Hoyt French and Charles Brockway Hale (eds.), "King Horn", *Middle English Metrical Romances* (1930; rpt. New York: Russell & Russell, 1964). なおこのテキストは Joseph Hall (ed.), *King Horn: A Middle English Romance* (Oxford: Clarendon Press, 1901) を再録したものである。
- 7) ロマンズの分類はいまだに議論の多いところであるが、ここでは便宜的に (そして古典的な) 十二世紀末のフランス人、ジャン・ポデルの分類に従った。ポデルは三つの題材 (*matières*), すなわち "de France, et de Bretagne, et de Rome la grant" を基準に分類することを提唱する。分類に関する議論の詳細は、Mehl, pp. 30-38 を参照。
- 8) Cf. Sands, p. 15.; W. R. J. Barron, *English Medieval Romance* (London: Longman, 1987), pp. 67-74.
- 9) ホメロスの『オデュッセイア』に遡るまでもないが、中英語ロマンスの、『ガウエイン卿と緑の騎士』もこれと酷似したものであると考えてよい。シェイクスピアの『ハムレット』も近似した主題を持つ。
- 10) ll. 586-605, 1251-1264, 2090-2157. 『ハヴロック』からの引用は『ホーン王』と同じく French and Hale, "Havelok the Dane", pp. 73-176. による。
- 11) 特に『ホーン王』とほぼ同時記に成立したとされる『ラクサ谷のサガ』は、北欧サガの特色と、大陸ヨーロッパの洗練とを兼備していて興味深い。Cf. Betty Radice (trans.), *Laxadaela Saga* (Harmondsworth, Middle sex: Penguin Books, 1969).

- 12) Cf. Michael Swanton, *Beowulf* (Manchester: Manchester University Press, 1978), p. 15.
- 13) 原文の引用は, F. Klaeber (ed.), *Beowulf and the Fight at Finnsburg* (Boston: D. C. Heath and Company, 1950) により, () 内にその行数のみを記す。以下, 日本語訳を忍足欣四郎訳の『中世イギリス英雄叙事詩「ベオウルフ」』(東京: 岩波書店, 1990) によって付す。
- ことの次第を, グレンデルの所業をば, ヒューラーク王の従士, / イェート人の勇士は家郷にあって聞き及んだ。/ 彼はこの世のかの時に於いて人類の中にて / 何人にもすぐれて力強く, やんごとなき / 偉丈夫であった。彼は八重の潮路を越え行く良き船を / 用意するよう下知し, かの君が加勢を必要とおられるこの際, / 白鳥の泳ぐ界を渡って勇武の王, / 高名なる君を訪ねよう, と語った。賢明なる人々にとって彼は掛け替えなき公達であったが, / この度の征旅を些かも思いとどまらせようとはしなかった。/ むしろ, 心猛き貴公子を励まし, 吉兆を占ったのである。
- 14) フロースガールはベオウルフを国の守り主として讃えている (1844-1861)。
- 15) 「予は若年の砌, 幾多の戦に / 敢然として従った。民の保護者として老いたる今も, 悪行を働く者が / 土の館より出で来て予を襲わんとするならば, / 予は進んで戦を求め, 誉れを挙ぐべき振舞いをなす所存。」
- 16) 舵のない小舟に乗せて海へ流すことは, 一種の神明裁判である。罪の有無の判断と処罰の執行の是非を神意に委ねたのであった。
- 17) 最も古く, 最も完成した写本, オックスフォード写本 (Bodleian MS. Digby 23) は, アングロ・ノルマン語で書かれており, イギリス国内で制作されたものであろうと考えられている。Cf. F. Whitehead (ed.), *La Chanson de Roland* (1942; rpt. Oxford: Basil Blackwell, 1985), pp. v-vii.
- 18) フランス語だけでも四つの写本が存在する。その他ヨーロッパの諸言語になるものがある。詳細は Raoul Mortier (ed.), *Les Textes de la Chanson de Roland, I: La Version d'Oxford* (Paris: La Geste Francor, 1940), pp. iii-xvi. 参照。
- 19) Cf. Gerard J. Brault (ed.), *The Song of Roland: An Analytical Edition, I: Introduction and Commentary* (University Park: The Pennsylvania State University Press, 1978), pp. 21-30.; Alan Hindley and Brian J. Levy, *The Old French Epic: An Introduction* (Louvain: Peeters 1983), pp. xii-xiv.
- 20) 従来悲劇の英雄ロランへの同情から, 第一, 二部がこの詩の中心で, 第三部は付随的な逸話と見なされてきたが, 近年の研究では, 前二部と第三部に緊密な関連があることが指摘されている。さらに, むしろ前二部を踏まえて展開する第三部, 皇帝の支配権の限界を痛感させられるシャルルマーニュと, 公の席でなされた侮辱に

対する自力救済権を主張するガヌロンが法廷内で罪の所在をめぐっておこなう抗争にこそ詩人の力点がおかれているという読み方が有力になってきている。 Cf. Brault, pp. 7-15.

- 21) 主要登場人物はそれぞれが内なる葛藤をそなえた存在である。彼らのおのおのは人間関係から生じる心理的葛藤を体験し、それが物語の主題の展開と不可分に結びついている。ロランはガヌロンの虚栄心につけこんで、彼を回教徒への危険な使者の任務につかせるが、その報復としてガヌロンに持ち前の攻撃的な性格を利用して挑発に乗せられ、シャルルマーニュの後衛部隊を率いることになる。ロランの短絡的で攻撃的な性格は彼自身を作戦上の窮地に追いやる。すなわちシャルルマーニュの率いる本隊に角笛を吹いて危機を知らせ援軍を要請することを、ロランはためらう。この自己の力に依存した誇大な名誉心のために彼は同僚配下の騎士たちを、そしてやがては自分自身をも破滅の危機にさらすことになる。ロランは自分の味方の騎士たちが次々に倒れてゆくさなかに自己の名誉心と作戦上の判断の間で、自分ばかりでなく親友オリヴィエや十二人衆 (paradins), そして率いる配下の騎士たち全員の命を犠牲にしなければならない葛藤を体験する。一方ガヌロンは異教徒との和平を主張することでロランと対立し、ロランへの憎悪を燃え上がらせ、ロランを破局へと導くが、その憎悪は結果的には自身の破滅へつながることになる。寵愛するロランを、私怨を遠因として失ってしまうシャルルマーニュは、ロランへの仕打ちは当然の自力救済権の行使であると主張するガヌロンの側と、国家権力の最高位に座しながらも、罪の所在をめぐって法廷において争わざるをえなくなる。この結果最終的には双方が代表者を出して、神明裁判である決闘でしか決することのできない立場におかれて、シャルルマーニュは身を焦がす焦燥を味わうことになる。
- 22) 原文の引用はすべて前掲のモルチェ版による。以下、注には有永弘人 (訳), 『ロランの歌』(東京: 岩波書店, 1965), からの日本語訳を参考までに掲げる。
- 「諸将諸公よ、シャルルこの地にわれらを残せり。／われらの王のため、われらまさに死すべし。／キリスト教の擁護に力を貸し給え。」
- 23) 鋼の焼刃の切尖を敵に突きつけ、／額の上より斬り下ろせば、／顔の中にて、……／右の頬、まっ赤に染まりたり。／鎖鎧も、腹の上部に至るまで、裂き破りたり。／神、彼を護り給う。地上に投げとばし殺されず。…… [チェリー] ……輝く鋼の兜めがけて、ピナベルを討つ。／鼻びさしに至るまで、打ち砕き裂き、／頭中より、脳味噌を流し出す。／返す手にて一抉りして、打ち倒し殺せり。／この一撃をもって、戦いは勝ちとられたり。／フランス勢叫んで、「神、奇蹟を行い給う！／ガヌロン、首吊りになること、まことに理なり。／また、彼の身を保証せしその縁者も同じ。」アオイ
- 24) 日は過ぎ去り、夜は暗くなりたり。／丸天井の室の中に王は休みぬ。／神より遣

わされて、聖者ガブリエル来りいう。／「シャルルよ、汝の帝国あげて、軍を召集せよ！／ひた押しに押して、ビールの地へ赴け。／アソフの城なるヴィヴィアン王を助けよ。／その市を、異教徒勢、攻め囲めり。／キリスト教徒ら、汝の援軍を求めて叫ぶなり。」／皇帝、これに赴くを欲せざらん。／「神よ、」と王は言う、「わが生涯、さても労苦多きことよ！」／目に涙して泣き、白髯をしごく。

- 25) 教義を説くことは、かえって教義と主題との倫理的矛盾を露呈することにもなりかねない。英雄詩の中ではキリスト教にもとづく殺戮が矛盾なく受け入れられた。Cf. Dorothy Sayers, *The Song of Roland* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1957), p. 19.
- 26) 「フランス勢をわれらに残したる皇帝、／この二万騎を特によりすぐりて留め置き。／一人たりとも卑怯なる者なきは、帝のよく知るところ。／主君のために、みな、大いなる困苦を忍び、／酷寒炎暑、堪え抜くべきなり。／かくて、血も肉も失うを義務とす。／君、その槍もて戦え、われはデュランダルもて。／このわが名剣、これ、王の給いしもの。／われもし死なば、これを手にせん者、いうならん。／さすがは、勇将の剣なりきと！」
- 27) 許婚者ロランの死を告げられ、悲しみに胸張り裂けんばかりのオードに、シャルルマーニュは、息子のルイを与えようと申し出る。シャルルマーニュにとって恋人は代替可能であった。彼には人の愛情の機微を配慮するゆとりなどない。オードはその場で息絶える(3717-3722)。
- 28) 宮廷風恋愛についてはその起源に始まって、実社会における存否に至るまで議論の絶えないところである。だが、確かに十二世紀半ばから末にかけて北フランスの宮廷を中心に、女性を高貴な存在として崇め、対象となる女性へ、へりくだった愛を捧げ、その恋の成就が困難であればあるほど愛が質的に高まるとする恋愛観が存在した。おそらくこの宮廷風恋愛の発展には封建制度の発達が大きな役割を果たしていると考えられる。君主への忠誠と封土を仲立ちとした封建制度が、末端まで浸透すると、もはや封土の分配が不可能となった。結果として封土を嫡子相続できない若者達が宮廷に集まってくる。この満たされない若者たちを宮廷につなぎ止めるために目上の女性を慕う宮廷風恋愛の伝統が発生したとの考え方である。宮廷風恋愛を含めて、騎士道の世俗的起源については、Maurice Keen, *Chivalry* (New Haven: Yale University Press, 1984), pp. 18-43. 参照。
- 29) 『ランスロ』からの原文の引用はすべて、Mario Roques (ed.), *Les Romans de Chretien de Troyes, III: Le Chevalier de la Charrete* (Paris: Champion, 1978). による。()内は行数。付記する日本語訳は拙訳。
- ランスロはその言葉を聞いた。「あなた[メレアガントの父親、プリアムス]が戦いをやめろと欲せられるのならば、それが私の望むところでもあります。」その言

葉が彼女の唇から発せられた途端、ランスロは攻撃の手をぴたりと止め、微動だに
しなかった。たとえ相手が自分を殺害しようとも、彼は相手に触れもしなければ、
身動き一つもしなかった。

- 30) 真に恋する者の作法で、たいそう卑下しながら、彼〔ランスロ〕は答える。「お
妃様、これはまことにつらいことでございます。ですが、私はこのわけを尋ねるこ
となどいたしません。」もしも王妃が彼に耳を貸したならば、ランスロは大いなる
悲しみを語つただろう。だが、驚いたことには、そして残酷にも、一言の返答もな
しに、彼女は部屋にひきあげてしまった。

- 31) 『ランスロ』冒頭に次の言葉がある。

Puis que ma dame de Chanpaigne
vialt que romans a feire anpaigne,
je l'anprendrai molt volentiers
come cil qui est suens antiens
de quan qu'il puet el monde feire
sanz rien de losange avant treire;
..... (1-6)

- 32) クレチアンはこの作品の主題 (matière) とその取り扱い方 (san) はマリ (Mari
de Champagne) から与えられたものだと述べている。

Del CHEVALIER DE LA CHARRETE
comance Crestiens son livre;
matiere et san li done et livre
la contesse, et il s'antremet
de panser, que gueres n'i met
fors sa painne et s'antancion (24-29)

- 33) 宮廷に帰りついたエレックは誰はばかることなく自負できるだけの、騎士として
の戦功を持つにいたる (ll. 6474 ff.)。『エレックとエニード』からの引用は、Mario
Roques (ed.), *Les Romans de Chretien de Troyes, I: Erec et Enide* (Paris:
Champion, 1978) により、() 内に行数を記す。なお、付記する日本語訳は拙訳。

- 34) この物語はラックの息子エレックを歌う、……ここで私は物語を語るが、この物
語はキリストの教えが続く限り、覚えられるであろう。これはクレチアンの誇りも
ある。

- 35) Jean Frappier, *Chrétien de Troyes: The Man and His Work*, trans. by Ray-
mond J. Cormier (Athens, Ohio: Ohio University Press, 1982), p. 80.

- 36) フニースは死んでよみがえる不死鳥 (フェニックス) の意。

- 37) [召使のテサラは、] フニースに毒薬を与えた。その薬を飲むや否や、目はかす
み、血を失ったかのように頬は蒼白となった。生気が失せて、生きながら手足をも
がれようともあらがうことはあるまいと思えた。ぴくりとも動かず、一言もしゃべ

らなかった。……フニースは暗い夜の帳が降りるまで墓の中に横たわった。

- 38) これを換言すれば男女間の恋愛の要素を取り入れることで、ロマンスは恋愛を通過儀礼とする一種の成長小説の可能性を与えられたということができよう。ちなみに、クレチアン・ド・トロワの作品は、「ランスロ」が、アーサー王妃グェニエールと円卓第一の騎士ランスロとの、封建制度のらちを越える宮廷風姦通恋愛を教科書的な忠実さで描き出し、後世への影響が多大であった。だが中世イギリスのロマンス作品においては、マロリー (Sir Thomas Malory) の作品など、アーサー王ロマンスの、特に結末部にあっては主題として重要な位置を占めるものの、それ以外ではクレチアン・ド・トロワの初期の作品に見られるような結婚を前提とした恋愛物語が主流であったといえる。
- 39) 騎士志願者が騎士叙任を済ませた後に自分の力量を示すことは、必ず要求されることであった。キーンは、慣習的に戦いの前夜に騎士叙任が行われたことを指摘している。(Keen, pp. 71-81.) 乙女の騎士への態度は異なるが、これと類似した主題を持つ作品に“Fair Unknown”の系譜の作品群がある。Cf. Sir Thomas Malory, *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Eugène Vinaver, p. 299.; M. Mills (ed.), *Libeaus Desconus*, pp. 85-87.